

# 遺伝判明 医師の道へ

## 当事者だからこそ貢献できる



筋ジストと闘う研修医

明地 雄司さん(松山)

(1面から続く)

筋強直性ジストロフィー

1に立ち向かいながら研究の発展を志す研修医

明地雄司さん(32)は、松山市

松前町2丁目には、鳥取

大大学院で遺伝子医療学

を研究していた2008

年、弟の純さん(29)が同

病気と診断されたのを機

に、自らも遺伝子検査を

受けた。「遺伝病なので

自分にも、と。手を開き

にくい症状も自覚してお

り、はつきりとさせたか

った」。遺伝が分かり症状

の進行を心配したが、根

本的な治療法がない難病

の研究発展に「貢献した

い」ことを始めたという。

進路を変え、翌年、病

気の研究が盛んな岡山大

大学院博士課程に進学。

「研究を深めるには臨床

経験や医学知識も必要。

当事者だからこそ、患者

さんの気持ちを一層理解

できる医師になれる」と

11年には福井大医学部に

編入し、今年3月、医師

国家試験に合格した。

病気の進行に伴う症状

は、手足や顔の筋力が低

下のほか、白内障や不整

脈、腎機能障害などさま

ざま。「診断を受ければ対

症療法で対応でき、悪化

する前に手を打つことも

できる。知識を持ち、定

期的な受診をすることが

重要」。病気の情報を提供

しネットワークを広げよ

うと、公開講座などを通

じて知り合ったメンバー

## 情報共有へ患者会結成 治療法開発目指す

らで患者会を結成した。現在は全国の約70人に輪が広がったが「まだまだ患者の数は多い」という。会の大きな目的には「患者登録」の啓発もある。

米国では筋強直性ジストロフィーの治療薬が開発中で、世界的な治験の進展が期待されているという。「国内での販売に向け、いかに多くの患者が日本にいるかを示すことも大切。症状をデータベース化することで、最新の医療開発にも役立つ」と意義を語る。

明地さんは「将来的には神経内科医となり、治療開発に向けた研究に取り組みたい」と展望を語る。病気の症状や療養のこつを記したパンフレットやホームページ(<http://www.dm-fami.jp>)を進め、一人でも多くの理解と協力をと呼び掛けている。

NPO法人「筋強直性ジストロフィー患者会」(東京都)メールアドレス [Ncontact@dm-fami.jp](mailto:Ncontact@dm-fami.jp) (伊藤絵美)

患者、医師として「筋強直性ジストロフィー」の治療の発展に取り組みむ明地雄司さん(2日、松山市)